

～洛西からの一読～

今回のテーマは「歴史ファンタジー」

ファンタジーというと、外国のお話のようなイメージがあるかもしれませんが、今回は日本独特のファンタジーをご紹介します。

平安時代、夜が今よりずっと暗く、鬼や化け狐などがもっと身近なものに感じられた頃が舞台のお話です。



鬼の橋

伊藤 遊／作，太田 大八／画 福音館書店

たかむら
篁は五条橋で出会った、亡くなったばかりの妹と同じ年頃の少女のことが気に掛かり、幾度となく様子を見に行くようになる。そんなある日、大雨で橋脚に流木が絡まり崩落しそうな橋を守ってほしいと懇願する少女の声に応えたのは、片方の角を失くした鬼だった。妹の死に自分を責め空虚な日々を送る篁、身寄りを亡くし、父が最後に人夫として働いた五条橋で暮らす少女、非道の限りを尽くし

片方の角を折られ流れ着いた鬼。失ったものを埋めるように関わり合う三人が迎える結末は一。

この世の橋とあの世の橋を舞台に、平安時代の実在の官僚ながら閻魔大王の役人であったなど不思議な伝説の残るおののたかむら小野篁の少年時代として描かれている。自分のために相手を思う気持ちから、真に相手のことを思いやる気持ちに変わるとき、それは自分自身への力にもなるのである。



源平の風 白狐魔記

斉藤 洋／作，高島 純／画 偕成社

人間に興味を持ち、人里近くに住むようになった狐はやがて人の言葉を理解し、狐に神通力を与えるという白駒山の仙人の話を目にする。仙人に会ってみたいと思った狐は、道中獵師や獵犬に追われたり、度々窮地に陥りながらも仙人の住むという白駒山に辿り着き、仙人のもとで修業を始める。やがて人間に化ける神通力と白狐魔丸の名を得た狐は里に降り、かつて危ないところを助けられた人間一源義経と再会する。

修行中、妙に生真面目な狐と、思いつきで色々課題を課し、面白がっている仙人とのやりとりが可笑しい。続編は現在 7 冊を数え、しらこままる白狐魔丸は織田信長や天草四郎、浅野内匠頭などと出会い、様々な時代の事件や歴史上の人物に関わっていく。狐の目線で描かれた歴史一興味がある方は、こちらも読んでみては。